

目次

令和元年度「まちのひろば」創出職員プロジェクトチームの取組について	1
【1班】防災空地で地域交流「小田らんとん横丁」	5
【2班】FUSOグリーンガーデンを活用したまちのひろばの創出について	9
【3班】まちのこえをカタチにするプロジェクト	16
【4班】NECの公開空地を活用したまちのひろばの創出について	20
「しもぬまべ共創プロジェクト」	

令和元年度 「まちのひろば」創出職員プロジェクトチームの取組について



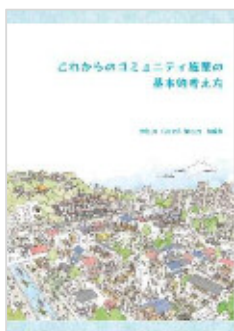
プロジェクトチームメンバー

はじめに

本市は、暮らしを取り巻く社会環境の変化を見据え、市民一人ひとりが多様なつながりをつくり、自分らしく幸せに暮らせる地域社会の実現を目指して、平成31（2019）年3月に「これからのコミュニティ施策の基本的考え方」（以下「基本的考え方」という。）を策定しました。

「基本的考え方」では、新しい概念として「市民創発」型のまちづくりを掲げています。「市民創発」とは、「様々な個人や団体会い、それぞれの思いを共有・共感することで生まれる相互作用により、これまでにない活動や予期せぬ価値を創出すること」と定義し、単なる足し算ではなく掛け算、それ以上の創出を目指すものです。

また、将来のありたい地域の姿を「希望のシナリオ」として掲げて、その実現に向けてバックキャストという手法を用いて市民の皆さんと一緒に議論し、試行錯誤しながら、できることからスピード感を持って進めていこうというものです。



「基本的考え方」冊子及び
市民向けパンフレット



職員プロジェクトチームの設置

このような「基本的考え方」の地域レベルの新たなしくみとして、多様なつながりを育む誰もが気軽に集える出会いの場として、官民間わず、多様な地域資源を活用して、地域の居場所「まちのひろば」を創出することとしています。

この「まちのひろば」の概念は緩やか、かつ幅広いもので、例えば、3人集まれば「まちのひろば」が展開し、何かしらの変化が生まれ、創発につながるという考え方です。



自宅を開放した認知症カフェや子ども食堂などの
「まちのひろば」のイメージ

「まちのひろば」は既に地域にありますが、更なる創出に向けた行政の関わり方として、公共施設の地域化、民間資源の活用推進及び「まちのひろば」の自主性や自律性を尊重した支援などが考えられます。そのための行政のあり方として、「市民創発」がもたらす様々な変化や動きに呼応することが求められていることから、意識改革と人材育成が必要不可欠です。

そのような中で、職員参加と意識改革を目的とした取組の一つとして、職員自らが地域に出て「まちのひろば」のモデルを実践していく、これまでにない庁内横断型のプロジェクトチームを、庁内会議であるコミュニティ施策推進会議の中に新たに設置することとしました。

プロジェクトチームの取組期間は令和元年度内とし、年度当初に全庁へメンバー募集を行ったところ、予想を上回る6職種20名の応募があり、オブザーバー2名を加えた若手中心の22名で始動しました。

本市でここまで多職種が一堂に会することは滅多にありません。多職種が持ち寄った知識などが化

学反応を起こし、これまでになかった新たな「まちのひろば」のモデル創出に向けて動き出しました。

オブザーバーを除いた20名が4つのグループに分かれて、若い職員の自由な発想を大事にしながら、「まちのひろば」の大切な要素である「市民創発」、「交流効果」、「持続可能性」の3つの視点については、各グループで意識して取組を進めていくこととしました。

また、プロジェクトチームの事務局は市民文化局協働・連携推進課となりますが、各区役所で行っているコミュニティの取組と同じ方向性を持てるように、常に各区役所と情報共有をしながら、取組を進めていきました。

多様な視点を取り入れた全体会

4つのグループがそれぞれオリジナルのモデル実践に向けて進めることとしましたが、グループごとの情報共有や知識習得を目的として、メンバー全員が参加する全体会を適宜開催することとし、その内容についてはモデルの実践に生かせるものとなるように工夫を凝らしました。

6月に開催した第1回の全体会は、プロジェクトチームのキックオフも兼ねて開催し、やわらかい雰囲気となるように市内のコミュニティカフェで行いました。根本となる「基本的考え方」を丁寧に説明し、「まちのひろば」について共通理解を図った上で、少し変わったタコ（他己）紹介や自主企画のプレゼンテーションなど、くだけた時間も設けて、メンバー間の交流を深める時間となりました。



タコ（他己）紹介の様子（第1回全体会）

7月に開催した第2回の全体会では、公共空間の活用等を研究されている鈴木美央さんによる勉強会も行いました。

メンバー以外の公共空間に関わる部署の職員も一緒に参加して、鈴木さん自身が手掛けた取組の事

例も交えた講義を受講し、その後は講義で出てきたキーワードを生かしたグループごとのワークショップにより、各グループの取組内容を深めていきました。



メンバー以外も参加したワークショップ（第2回全体会）

8月に開催した第3回の全体会は、NECの「未来創造会議」のメンバーとの共創セッションも行いました。市内に事業所を有するNECが取り組む「未来創造会議」は、実現すべき未来とその課題を解決する方法を構想するもので、当プロジェクトの取組とも大きく共鳴することから共創セッションが実現しました。

行政の強みである現場の知見、NECの強みである技術など、それぞれを生かしたワークショップにより新たな視点が生まれていきました。



NECとの共創セッションの様子（第3回全体会）

その後も、9月と3月に各グループの中間報告と最終報告の共有を目的とした全体会を開催しました。

様々なイベントへの参加

プロジェクトチームの取組は、関係する取組と連携しながら、他のイベント等にも積極的に参加することにより、創発を促し、広がりを持たせることを意識しました。

11月には、「まちのひろば」の市民向け普及啓発イベントである「まちのひろばフェス」にメンバーが参加して、首都大学東京 饗庭教授×地域活動団体×市長のトークセッションに参加するとともに

に、職員プロジェクトチームとして分科会のブースを持ち、各グループのモデル実践の取組状況を市民へ中間報告し、意見交換を行いました。分科会に参加した方のアンケートで約9割の方が「大変良かった」、「良かった」と回答していることから、地域に飛び出していくこれまでにない取組に対する市民の関心の高さが伺えました。



「まちのひろばフェス」トークセッション



「まちのひろばフェス」分科会

また、事務局としても「川崎100人カイギ」や「TIP*S」(※)等、地域のつながりづくりに関係するイベントにも積極的に登壇し、プロジェクトチームの取組を紹介することで、多くの方に知っていただくとともに、場合によっては一緒に関わっていただけるように心がけました。実際に「川崎100人カイギ」の会場である「unico」(※)は、その後3班のイベント会場の一つになりました。



「TIP*S」のイベントの様子

※「TIP*S」とは、中小機構が運営する新しい学びの場です。

※「unico」とは、川崎区日進町にあるデザインシンカーが集まる創造的複合拠点です。

さらに1月には、主に職員向けである「チャレ☆かわ」の特別企画において、各グループのモデル実践の報告を行いました。取組を通じた課題や工夫を交えた報告を行い、多くの職員に取組内容を知ってもらう機会となりました。



「チャレ☆かわ」の様子

当初は3月の全体会と併せて、庁舎外のオープンなスペースで市民向けの最終報告会も行う予定でしたが、新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、延期することになりました。

取組全体を通じての成果と課題

各グループによる取組は別途報告するため、取組全体を通じての話になりますが、職場も職種も異なる職員が積極的に地域に出て、地域の方や企業など様々な主体と一緒に、時に楽しみながら、時に悩みながら地域に埋もれていた資源などを活用して、8つのモデル実践を行えたことは大きな成果だと思います。「チャレ☆かわ」の報告後に、市長から「発想の転換をしていくということがこれからはすごく求められていくし、ある意味こういうプロジェクトを通じて私たちの仕事の見方そのものを変えていくいいきっかけになったのではないかな。」というコメントがあったことから、少しですが地域や庁内に新しい風を吹かせることができたのではないかと思います。



各種イベントチラシ

その一方で、いくつかの課題も見えました。特に、関係者との打合せやグループ別の打合せなどが当初想定していた以上にかかったことや、地域や企業など、相手と一緒に取り組んでいく取組のため、当初の取組期間終了後もプロジェクトチームが継続して関わっていくが必要になる場合もあったことなどがあげられます。前者については、働き方改革の推進もある中で効率的、効果的に実践していくかを考える必要があるとともに、後者については、単年度としているプロジェクトチームの事業内容自体の考え方も含めて検討していく必要があると考えています。

来年度の取組に向けて

これまでにない取組を一から走りながら考え、つくっていったため、事務局として至らぬ点が多々あったと思います。しかしながら、取組を通じてメンバー及び地域をはじめとした様々な方の地域への想いや積極的な姿勢などによって生まれた多様な「まちのひろば」を庁内外の方々に知っていただき、身近に感じていただくことはできたのではないかと考えています。

来年度（令和2年度）は、「基本的考え方」に基づく取組の2年目として、本年度の取組から学んだ課題への対応はもちろんのこと、更なる職員の意識改革を進めていくプロジェクトとして、「まちのひろば」の見える化だけではなく、さらに地域の方々の想いを形にできる取組としてバージョンアップしていきたいと思っています。



地域に広がる「まちのひろば」～「希望のシナリオ」のイメージ～

【1班】防災空地で地域交流「小田らんとん横丁」

メンバー

市民文化局コミュニティ推進部区政推進課

鈴木 真

健康福祉局保健所医事・薬事課

樋口 聖恵

まちづくり局市街地整備部防災まちづくり推進課

鈴木 信成

幸区役所まちづくり推進部企画課

田邊 寛隆

市民文化局コミュニティ推進部協働・連携推進課

前田 明日香

防災空地に着目して

まちのひろば創出職員プロジェクトチーム1班は、市民文化局、健康福祉局、まちづくり局、区役所といった様々な所属と薬剤師、建築職といった異なる専門職種のメンバーで構成されたチームです。

それぞれ関わってきた業務が異なることから、まず初めにこれまで経験してきた業務や興味のあること、やってみたいことを共有することから始め、プロジェクトを実践する上で班として大切にポイントを3つにまとめました。

☆PROJECTポイント

- ・地域の人、地域の特性を意識すること
- ・スモールスタートで行うこと
- ・持続可能性の効果検証をすること

このポイントを踏まえ、実施する場所を考えた際に、メンバーに防災まちづくり推進課の職員がいたことから、小田地区にある防災空地を活用してはどうかという話があがりました。

防災空地は古い木造住宅が多い密集市街地において、火災の延焼防止や災害時の一時避難場所として設けられる空地のことをいいます。川崎区の小田地区は木造住宅が多い地域であり、2020年3月現在3つの防災空地が設けられています。

早速現地を確認しようという話になり、メンバーで小田地区の防災空地を見に行くことにしました。防災空地は、1つは道路に面したものの、もう1つは住宅に囲まれています。今回、実験的にプロジェク

トを行うことを踏まえ、まずは人の目につきやすい道路に面した防災空地で実践することにしました。



道路に面した小田三丁目防災空地

道路に面した防災空地には、かまどベンチや町内会の防災倉庫が置かれています。また、普段空地を管理している町内会の方が設置したテーブルや花壇があり、きれいに整備されていることがわかりました。

プロジェクトの3つのポイントに照らし合わせ、場所の位置や広さが適当であり、誰もが気軽に立ち寄れる地域の居場所である「まちのひろば」を創出するという目的からも、最適な場所であることから、この防災空地を活用していく方向性でまとめました。

まちにあうレトロな企画を

企画について、まずは自分たちでどのようなことができるかを整理することにしました。防災空地を見学に行った際に、小田地区の周辺も探索し、小田のエリアが昔ながらの下町情緒あふれたレトロな雰囲気のまちであることをメンバーの誰もが感じていました。今回実践する企画についても、そのレトロな親しみやすい雰囲気を活かし、町内会の方がこれまで防災空地を知ってもらうために実施してきた取組を大切に、町内会と連携してイベントを実施することにしました。

具体的なアイデアとしては、昔の遊び、出張駄菓子屋、紙芝居などがあがりました。



また、イベントの開催だけでは、持続可能なものにならないため、防災空地を活用するアイデアを募るオープンワークショップも合わせて企画することにしました。

企画内容が大体固まったところで、小田三丁目の町内会の方に企画書を持って、お話を伺いに行ったところ、町内会の方々は、企画の内容を見て快諾してくれました。早速日程調整をし、10月26日にイベントを開催することが決まりました。

イベントの準備は町内会の方と職員プロジェクトチームで分担しました。職員プロジェクトチームがチラシを作成し、印刷したものを町内会の方に渡すと、町内会の方々が回覧や掲示板への掲示を行ってくれるなど、強みを活かした分担をしたことで、作業がスムーズに進みました。

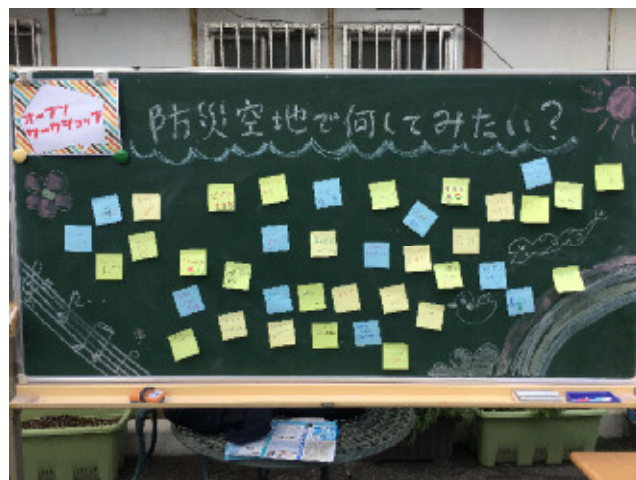
そして迎えた当日、天気は快晴でした。レトロな雰囲気を出せるよう買っておいたランタンが青空に映え、普段と違うまちの風景を作ることができました。

子どもたちにけん玉やコマ回しを教える町内会の方々、駄菓子を楽しむ子どもたち、そして、オープンワークショップには親子連れの姿が見られました。オープンワークショップはイベントの参加者に防災空地の活用アイデアを書いてもらい、掲示板に貼ってもらうというもので、幅広い世代が参加してくれました。

住宅街の限られた敷地の中には、数時間の間に、100人ほどの人が次々と訪れてくれました。



防災空地を彩るランタン

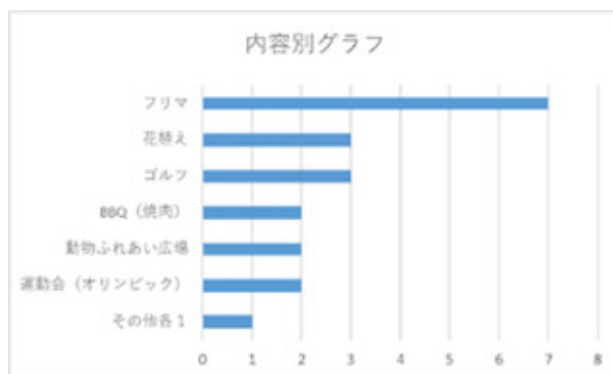


イベントで実施したオープンワークショップ

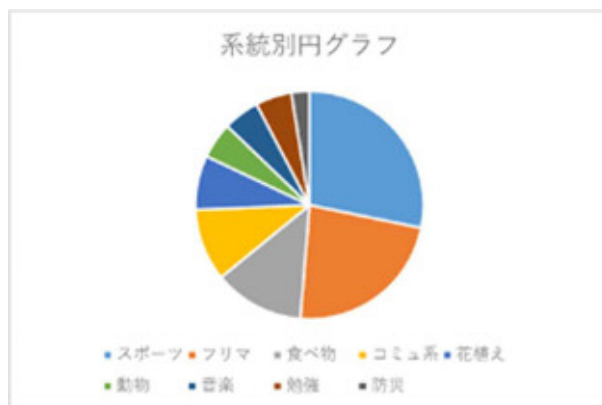
幅広い世代の活用アイデア

オープンワークショップでは、37件の意見が集まりました。希望の多かった活用アイデアは、フリーマーケットが最も多く、次いで花植えやゴルフ、バーベキューや動物ふれあい広場、運動会など多様な意見が出ました。

オープンワークショップ分析結果（内容別グラフ）



オープンワークショップ分析結果（系統別グラフ）



オープンワークショップを通じて、防災空地の活用に関心がある人たちが一定数いることがわかりました。一方で、イベントに参加してくれた方からしか意見を聞くことができなかったため、町内会のもっと多くの方に活用のアンケートをとってみることで、より広いアイデアと、活用したい人が見えてくるのではないかという話になりました。

早速アンケートを作成し、町内会の方から協力をいただいて、町内会回覧でアンケートをとることにしました。

アンケート調査票

記入後、回覧後に集付の封筒に入れてください

小田3丁目防災空地のイベントに関するアンケート調査

問1 あなた（記入者）ご自身のことについて、当てはまるものに○を付けてください。

性別	男性	女性	その他					
年齢	10代以下	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代以上
小田地区での居住年数	1年未満	1～5年	5～10年	10～20年	20～30年	30年以上		

問2 あなたは小田3丁目に防災空地があることを知っていましたか。

1. 知っている（知ったきっかけ：） 2. 知らなかった

問3 10月26日に小田3丁目防災空地で、「小田さんなんでも」のイベントが開催されたことを知っていましたか。

1. 知っており参加した 2. 知っていたが参加しなかった 3. 知らなかった（知ったきっかけ：）

問4 防災空地でどんなイベントがあれば参加してみたいですか。（複数回答可）

1. スポーツ（ヨガ、バレーボール、体操など） 2. フリーマーケット
 3. パーバキューやビアガーデンなどの飲食会 4. 小学生が主体の遊び、バレーボールの交流会
 5. 防災会などの懇談会 6. 懇談会 7. その他（）

問5 今後、防災空地を使ってやってみたいことがありますか。

1. やってみたいことがある（どんなことを？）
 2. 具体的なアイデアはないが興味はある 3. 特にない

問6 その他休明があれば自由にご記載ください。

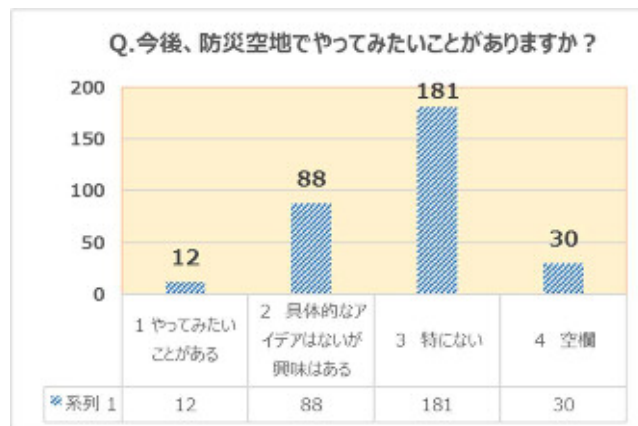
※記入のお願いです。アンケートについては、防災空地の今後の活用に使っていただきます。また、結果は回覧させていただきます。町内会の回覧板等に記入して配布させていただきます。
 （本編）小田3丁目防災空地（協力）町内会「まののり」等「職員プロジェクトチーム」等
 （監修）小田3丁目防災空地・防災会事務局 044-200-2024

町内会の方が快く協力してくれたおかげで、300件を超えるアンケートを回収することができました。

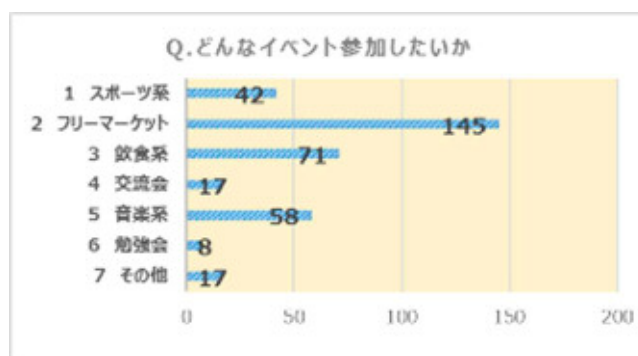
早速集まったアンケート結果を分析してみると、防災空地の活用に興味があるという方、活用してみたいという方が100人近くいることがわかりました。

また、活用アイデアについては、イベントで集めたアイデアの時と同じく、フリーマーケットが一番人気であり、生活に身近な活用アイデアに関心が高いことがわかりました。

アンケート分析結果①



アンケート分析結果②



また、アンケートの実施と同時並行で、町内会の役員の方々にも防災空地の活用についてヒアリングを行いました。ヒアリングからは、町内会業務が忙しく、今の業務に追加して、地域交流のためのイベントなどに時間を割く余力がないこともわかりました。

これらの結果を踏まえて、職員プロジェクトチームのメンバーで改めて今後の方向性を検討したところ、防災空地を活用したいという人と町内会の役員の方々を繋ぐような仕組みを職員プロジェクトチームのメンバーで作ることができたら、持続的な地域交流に発展させることができるのではないかという考えが浮かびました。

そこで、活用したい人と町内会の方をつなぐイベントづくりのワークショップを開催してみることになりました。

イベントづくりワークショップを企画

イベントづくりワークショップの開催日を3月20日に決め、町内会の方と連携して参加者募集のチラシを配布しました。

人数は多くはないものの、数人の方からイベントへの参加希望がありました。



イベントづくりワークショップ参加者募集チラシ

ところが、イベント開催前に新型コロナウイルスの感染症拡大が課題となり、ワークショップの開催を今回は残念ながら見送ることになりました。

まとめ

最後に、この1年間のプロジェクト活動を通じて、町内会の方々との連携が楽しく、勉強になりました。

また、この地域に住んでいる若い世代の方々も地域に関わるきっかけを持つことで、町内会活動への理解が深まるのではないかとという新たな視点に気づくことができました。

今回は、イベントづくりワークショップまで開催することはできませんでしたが、この状況が落ち着いたら、ワークショップに参加を希望してくれた方々も一緒に今後の展開を考えていきたいと思えます。

デンの「存在」②グリーンガーデンの「使い方」③地域の新たな「つながり」の3つに気付いていただくために、プロジェクトチームから様々な「使い方」を提案して、地域の方々がそれらを実践できるイベントを開催するという方向性を決めました。また、実践にあたっては、三菱ふそうトラック・バスと川崎市が平成30年3月に結んだ包括連携協定において、連携事項の一つとしてグリーンガーデンの地域開放、利活用の検討をあげていることから、少しでも多様な「使い方」を提案できるように、可能な範囲でルールを超えた「使い方」をすることができるか調整していくことにしました。

イベント実現に向けた調整のスタート

●三菱ふそうトラック・バス

方向性が決まり、いよいよイベント実現に向けた調整がスタートしました。この取組は、管理運営している三菱ふそうトラック・バスの許可がないことには進みません。そのため、貸付契約を結んでいる上下水道局へ事前に確認をとった上で、7月25日に三菱ふそうトラック・バスへ伺い、プロジェクトチームの目的と私たちのグリーンガーデンの活用に対する想いを伝えました。

三菱ふそうトラック・バスからは、地域の活性化を目的とした取組であるため、特例としてルールを超えた「使い方」の許可を検討する旨の返事をいただきました。また、併せてグリーンガーデンを整備する際に意見交換を行った6町内会・自治会（上平間第1町内会、上平間第2町会、上平間第3町会、上平間伊勢浦町会、鹿島田町内会、鹿島田グリーンハイツ自治会）にプロジェクトチームから事前に意向確認をするよう依頼がありました。

●6町内会・自治会（以下、町内会）

三菱ふそうトラック・バスから許可をいただき次第、地域の方々に説明に伺う予定でしたが、前倒して6町内会が属する幸、中原の両区役所に事前説明、確認を行った上で、8月上旬には各町内会に取組について直接説明に伺いました。

中原区の4町内会（上平間第1町内会、上平間第2町会、上平間第3町会、上平間伊勢浦町会）は同時に、幸区の2町内会（鹿島田町内会、鹿島田グ

リーンハイツ自治会）は個別に町内会長へ取組内容の説明に伺い、グリーンガーデンについてもざっくばらんに意見交換をしました。町内会長からは、「グリーンガーデンは一時避難所になっているが、町内会内でも認知度は低く、課題だと認識している。」「グリーンガーデンの認知度が高くなる取組であれば応援したい。」「風揚げとか花火は盛り上がるよね。」「どこまで協力できるかわからないが、できることは一緒にやりたい。」「取組自体は賛成、どんどんやって欲しい。」という賛同をいただくとともに、「事故が起きた場合の責任をはっきりすること。」という意見もいただきましたが、取組の方向性については、全町内会から賛同を得ました。

●三菱ふそうトラック・バス（2回目）

8月21日に6町内会への説明結果について、三菱ふそうトラック・バスに伺いました。方向性については賛同を得た旨を説明したところ、川崎市と包括連携協定を結んでいる中にグリーンガーデンの活用についても明記されていることもあるので、できる限り協力したいと返事をいただき、いよいよ具体的に取組を進めていくことになりました。

まずは小さくやってみよう！

具体的に取組を進めていく上で、まず自分たちがイメージを持たないことには地域の方々にも伝えることができません。そこで、まずは小さくてもできることをメンバーでやってみようということで、9月14日に有志メンバーによる「青空ヨガ」を実施しました。実施してみると、広大な緑地ゆえの日頃味わうことがない心地よさと開放感を感じるとともに、ヨガの間もほとんど人がいなかったグリーンガーデンにもっと多くの方に足を運んでいただきたいという想いを強くしました。



有志メンバーによる「青空ヨガ」

そして、次のステップとして自分たちだけでなく地域の方々とも一緒に小さく何かやってみようということで町内会に相談したところ、10月27日に中原区の4町内会で「グランドゴルフ大会」を開催するので、一緒に参加しないかと声をかけていただきました。こちらにも有志メンバーで参加し、一緒にグランドゴルフを楽しみながら地域の方々と親睦を深めるとともに、今回の取組について説明する機会までいただきました。その結果、地域の方々とメンバーに市民創発が起こり、共に様々な「使い方」ができるかもしれないとイメージを膨らますことができ、実際に地域の方々からは、「タイヤや竹を使った昔遊びをしてもいいな」など「やってみよう」という声もちらほら出始めてきました。



町内会のグランドゴルフにも参加

地域の「やってみようこと」を集める

じっくりと時間をかけて地域の方々をはじめとした関係者などへ説明を重ねるとともに、いくつかの小さな活用で、少しずつ地域の方々にも取組を知っていただき、熱が高まってきました。このタイミングでイベントの開催日を1月18日に決定するとともに、イベントの趣旨に賛同いただき、「使い方」を実践してみたいと思っている協力者向けに説明会を開催することにしました。

説明会は平日の午後の開催ということもあり、参加者がいるか不安でしたが、9名の方にお越しいただき、町内会の方々からは焼きそばづくりや昔遊びなどを、町内会以外の方からもハンドメイドのワークショップやボディマッサージなどをやってみようという声をいただきました。この時点では、三菱ふそうトラック・バスからどこまでの「使い方」の許可を得られるか分からなかったのですが、まずは御参

加いただいた方から様々な「やってみよう」の声を集めました。



説明会はグリーンガーデン隣のアニマモールで実施

また、幅広い「使い方」の可能性を広げるために、近隣の多様な団体など町内会以外にも今回の取組の説明したところ、こども食堂や多摩川太鼓の活動団体、外遊び体験を行っている団体などから新たな「やってみよう」の声を集めることができました。

これらの集めた「やってみよう」の声をプロジェクトチームで整理した上で、三菱ふそうトラック・バスに提案させていただいたところ、今回は特例ということで、ほとんどの「使い方」について許可をいただくことができました。ルールを超えた主な特例としては、

- ・調理のために火気を使用すること
- ・ハンドメイドのワークショップや実費販売
- ・太鼓演奏により大きな音を出すこと
- ・柵の中での犬の運動

があげられます。

また、イベント開催にあたって、禁止事項となっている自転車の乗り入れや閉門時間後の荷物の放置についてもエリアを定めた上で許可をいただくなど多大な協力を得ることができました。

管理運営を行っている三菱ふそうトラック・バスに全面的に後押しを受け、イベントを開催する体制が整ってきました。ここで、イベント名を「ひろばフェス in FUSOグリーンガーデン」と決定し、「やってみよう」と声をあげていただいている方々に最終的な意向確認をとることと並行して、チラシの作成にも取りかかりました。

意向確認の結果、町内会、地域の方々及び団体による14の「使い方」を実践することに決まりました。

た。

イベントの開催にあたっては、可能であれば地域が主催となる形が望ましいと考えていましたが、グリーンガーデンを活用した初めての大規模な取組であること、多くの団体や個人の実践者の取りまとめやルール作りなどを開催日までの短期間で調整していく必要があることから、今回はプロジェクトチームが主催として開催していくこととしました。

実践する 14 の使い方

実践者	使い方（内容）
上平間第 1 町内会	揚げ餅、豚汁
上平間第 2 町内会	焼きそば
上平間第 3 町会	玉こんにゃく、飲料
大家族ふるさと食堂	カレー
平間子ども食堂	おでん
ココ食堂	豚汁、ハンバーガー
個人	ハンドメイド販売・ワークショップ
個人	ハンドメイド販売
個人	プログラミング体験
個人	昔遊び（輪投げ）
D S E（犬の競技団体）	犬の運動会、しつけ教室
多摩川太鼓	太鼓演奏、体験
プレイグリーンパーク	ペーパークラフト
プレイグリーンパーク	体を動かす遊び体験

安全で楽しめるイベントに向けて

イベント内容も決まり、当日に向けて細かい調整が始まりました。広い緑地で 14 の「使い方」を実践する大規模なイベントとなるため、トラブルがなく安全で実践者と参加者がともに楽しめるものとしていかなければいけません。そのために特に次の三つのことを意識して準備を進めました。

一つ目は、レイアウトと動線です。小さな子どもから高齢者まで多世代が参加する中で、犬が参加できる内容もあるため、主催者として一層の安全を図るために、犬を連れた方が入れるエリアをネットで仕切り分けることとしました。また、レイアウトや出入り口からの動線についても、お越しいただいた方が多くのブースに参加していただけるように、出入り口から離れたところにお食事ゾーンを配置す

るとともに、余白をつくることを意識し、誰もが自由に利用できる「ピクニックエリア」を会場の中心に広く取るようにしました。



余白をつくることを意識したレイアウト

二つ目は、万が一の事故等の対応です。これまで活用したことのない場所で多くの使い方を実践し、参加者も試算で 1,000 名を見込むイベントとなるため、万が一の事故等に迅速かつ的確に対応できるように、救護所の設置や A E D 設置場所及び近隣救急医療機関の掲示等を行うとともに、イベント保険にも加入することとしました。

三つ目は、実践者への情報共有です。14 の「使い方」を実践するため、各々に目的及び運営内容等の共通理解がないと限られた時間の準備、本番、撤去を含めた全体のイベント運営がうまくいきません。そのため、事前に実践者向けの説明会を実施するとともに、細かい内容まで記したマニュアル作成を行い説明会の中で共有することとしました。

実施に向けたいくつかの準備

「ひろばフェス i n F U S O グリーンガーデン」の実施日も近づいてきた 1 月 9 日に実践者向けの説明会を開催しました。平日午前中にも関わらず約 8 割の実践者に参加いただき、まずはイベントの目的から前日及び当日の流れ、荒天中止時の連絡体制などについてマニュアルを基に説明し、共有しました。その後、現地に移動してレイアウトや搬出入の流れについて確認をしました。



晴天の中の実践者向け説明会

また、今回は露店による火気の使用及び調理した飲食物の提供があるため、それぞれ事前に関係する部署に届出を行う必要がありました。グリーンガーデンは中原区(管理棟は幸区)に立地しているため、前者は中原消防署予防課に「露店等開設届」を、後者は中原区地域みまもり支援センター(福祉事務所・保健所支所)衛生課に「行事開催届」を提出するために、イベントの一か月以上前から事前相談を行い、滞りなく届出を完了するようにしました。

そして、イベントの広報についても積極的に行っていました。グリーンガーデンと一目で分かり、多くの方が来てみたいと思えるようにイラストや写真を散りばめたチラシ作成に加えて、かわさきFMの番組出演や地域情報誌へのイベント情報の提供などにより、多くの方にグリーンガーデンを知ってもらい、来てもらえるように心がけました。



「ひろばフェス in FUSOグリーンガーデン」のチラシ

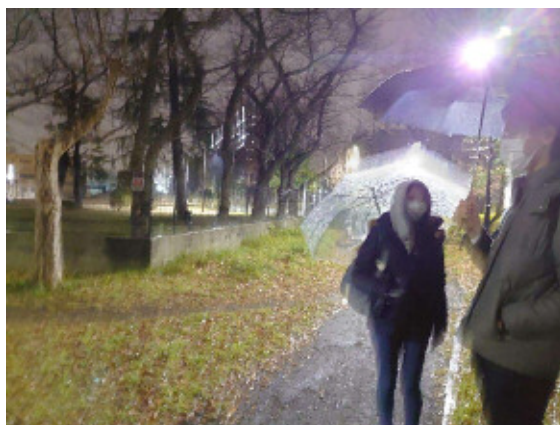
このように、限られた時間の中でも実施に向けた準備をメンバー間で分担しながら進めていき、2日前には事前準備を一通り完了することができましたが、唯一気がかりなことがありました。それは当日の天気予報が未明から明け方まで雨ということ

です。マニュアル上では前日の正午の時点で実施の可否を判断することとしていたので、前日の正午にメンバー全員が集まり、天気予報を確認しました。その結果、明け方には雨が止む予報であったため、開催する方向に決定し、実践者にその旨を連絡しましたが、雨が止まない可能性もあるため、①当日の朝6時に最終判断をして連絡すること②開催する場合も雨上がりのぬかるんだ会場かつ寒くなる予報であることから、実践の有無は実践者の自由であること③来場者が少なくなると見込まれることから飲食物等の事前の準備は少なめにしておいた方がよいことを併せてお伝えしました。

その後、夕方にグリーンガーデン内に事前搬入できる備品を搬入し、後は当日の天候を祈るのみとなりました。

無念の開催中止

当日は朝6時にメンバーでグリーンガーデンに集合しました。前日の予報では止むはずの雨が降り続いており、天気予報も10時頃まで雨が降り続ける予報に変わっていました。グリーンガーデン内にも水たまりが多くできており、雨が止んだとしても会場の状態から開催することは難しいことから、残念ながら開催中止という判断を下し、速やかに実践者に電話連絡しました。また、参加者にも中止の連絡が行き渡るように、開催中止の情報をHPに掲載するとともに、グリーンガーデン周辺に中止の掲示をしました。



「残念ながら当日は雪も交じる悪天候に

中止の連絡や対応が一通り完了した後、当初からイベントに協力いただいていた各町内会へ挨拶に

伺いました。

今回の取組の御礼と中止に至った経緯について個別に説明したところ、ほとんどの町内会から「今日は残念だったけど、またいつでも声をかけて」といった激励をいただいた一方で、「中止の判断が遅く食品ロスにつながってしまう」、「予備日は必要なのではないか」といった指摘もいただきました。また、既に切り替えてイベントで提供する予定であった食物を町内会館でつくって、みなさんでわいわい食べている町内会もありました。

そして、町内会以外の実践者の方々からも「ぜひ次があるならやりたい」という声が多くあがり、メンバーの間でも可能であれば再チャレンジをしたいという想いが強くなっていました。

ピンチをチャンスに！再チャレンジへ

中止に伴う作業や関係者への挨拶が一段落してからメンバーで集まり、今後の展開について話しました。このまま中止になると、グリーンガーデンを知ってもらうことと、「使い方」の提案はある程度できたかもしれませんが、そこから生まれるつながりをつくるのが出来なくなってしまいます。また、町内会や地域の実践者の多くが「次があるならぜひやりたい」と言っている中で、メンバーも全員が「再チャレンジしたい」という想いでした。

そこで、三菱ふそうトラック・バスに今回の取組の御礼と中止に至った経緯を説明する際に、地域とメンバーの想いとして本年度内に同内容で再チャレンジをさせていただけないか相談したところ、快く許可していただきました。

早速、日時を3月14日（土）と決めた上で、原則として同内容としながら、中止となった際に出てきた課題に対しては新たに対応していく形で開催することとしました。具体的には、①中止の判断は前日までに言い、実践者側の負担等を軽減する②予備日を翌日（15日（日））に設けるとともに、両日とも悪天候の際は隣接する平間会館において可能な範囲で開催することとしました。

また、鹿島田町内会がお声がけした鹿島田商店会から新たに屋台を実践していただける提案もいた

だくなど、再チャレンジに向けた新たな盛り上がりも出てきて、再チャレンジできる形が整ってきました。

未曾有の事態に苦渋の中止判断

ところが、このように再チャレンジに向けて着実に進めてきたところ、2月に入ってから突如新型コロナウイルス感染症という新たな問題が生じてきました。

未曾有の事態に、チラシ印刷や準備が進む前に出来る限り早めに開催の有無を決定した方がよいとメンバー間で判断し、急遽2月26日にメンバー全員で協議する場を設けました。その場で、全員の総意により感染拡大防止のために再チャレンジを中止とすることとしました。

非常に残念でしたが、決定後は速やかに実践者をはじめとした関係者へ中止連絡を行うとともに、進めていた再チャレンジに向けた準備も停止することとなりました。

少しでも前進を

突然発生した先の見えない感染症により、本年度の取組であるプロジェクトチームによるイベント開催はできなくなってしまいました。しかし、このままこの取組が終わってしまったのでは、グリーンガーデンの「存在」の気付きと「使い方」ができる「かもしれない」という気付きしか当初の目的は達成できなくなってしまいます。そのため、今後、地域の方に様々な「使い方」ができることに気付いていただき、さらにそこから生まれる「つながり」に気付いていただくために、今回のイベントで実践予定だったことなどを地域の方中心に行いたいと相談があった際は、三菱ふそうトラック・バスの方で前向きに相談にのっていただけないかプロジェクトチームから提案することとしました。

3月5日に三菱ふそうトラック・バスへ再チャレンジの中止の経緯と今年度の取組の御礼に伺った際にその旨を提案したところ、同社もグリーンガーデンの地域開放、利活用の検討を進めていることから、町内会主催の行事に限り、相談にのれるように検討する旨の回答をいただきました。新型コロナウ

ウイルス感染症の影響により、地域の方々への調整などができないために、具体的な流れや条件については令和2年4月時点では保留となっていますが、地域にとって様々な「使い方」が少しでもできるように、協働・連携推進課を中心に三菱ふそうトラック・バスと地域とともに新たな相談体制等を固めていく予定です。

まとめ

10か月にわたって取り組んできた中で、グリーンガーデンを活用したイベントは未曾有の事態等により残念ながら開催できませんでしたが、地域の方々にグリーンガーデンの存在と使い方についてはある程度気付いていただけたとともに、グリーンガーデンの周りの地域には様々なことを「やってみたい」と思っている方がいて、その方々に「使い方」の提案をすることはできました。

しかし、やはり実践できるイベントが開催できなかったため、新たなつながりづくりをしきれず、地域のグリーンガーデンへの想いを確認するところまで行きつくことができませんでした。

今回の取組を通じて、グリーンガーデンを管理運営している三菱ふそうトラック・バスが地域開放、利活用を前向きに検討しているというので、引き続き、企業緑地使用のハードルが下がって、地域が活用しやすくなるモデルに向けて調整を進めていくとともに、地域主体のイベントが生まれた際は、2班のメンバーも一市民として一緒にグリーンガーデンを「まちのひろば」として楽しく活用していきたいと思います。

まちづくり・まちのひろば創出を実践する越水さんから話を聞き、溝の口駅周辺の店舗を中心にまち歩きをするというものです。



「越水さんよりテーマトーク「愛されるまちに。」

関屋精米店、写真小屋山ちゃん、坂戸屋さんといった多業種の地域に根差した魅力的な個人店舗を回り、それぞれの店主の方からお話を聞きました。

参加した職員からは、「自分の仕事に前向きに取り組むだけでなく、やりたいことを自分で見つけてチャレンジできるような今回のプロジェクトは新しい発見だった。」「地域への熱い思いや商売へのこだわりに触れることができ、区職員としてもっとまちに興味・関心を持つべきだとあらためて感じた。」などの感想をもらいました。班のメンバーにとっても、実際にまち歩きをしてみたことで、それぞれのお店の一つ一つがまちの歴史であり、魅力であることがわかりました。住んでいなくてもまちに少し深く関わることで、まちへの愛着を感じるためのきっかけになると感じました。

2. まちの当事者になるきっかけづくり

コミュニティの生まれる場の一つとして、スナックをまちでやってみたいと言っていた子育て中のママの想いの実現に向けて、職員プロジェクトチームが伴走支援を行いました。

市役所とスナックといったコンセプトはあまり繋がらないように思いますが、他都市においてもお客さん同士の会話を促し、コミュニティを作ることができるとして「コミュニティスナック」という取組が広がりつつあります。個性豊かな地域の子育て中のママたちを主役にできる取組であり、「あえて

尖る」企画になるのではないかと思います、挑戦しました。



この取組では、

- ① ママを中心に地域の人が気軽に集える居場所づくりの一つとなること
- ② 飲食店等と連携し、飲食店にもメリットを生み出すこと
- ③ 持続可能という観点で運営経費についても考慮すること

を意識しながら進めました。



当日の様子：飲食店と連携した場づくり

その結果、イベント当日は、15名ほどの席に次々にいろいろな方が訪れ、最終的に45人の方が参加してくれました。

当日アンケートでは、アンケート回答者のうち「9割以上」が「3人以上との新たな出会いがあった」という結果になりました。

実践してみたことで、飲食店にもメリットがある形で連携することにより、場を提供してもらえることや、その他当日の運営に係る経費も、その実費分を参加費で十分対応できることがわかりました。

経費面でも無理なく持続できる取組であり、継続実施できれば、より広いコミュニティづくりに繋がっていくことができる可能性を感じました。

3. 公共空間の新しい活用をお手伝い

利用のハードルが高い公共空間の新たな活用を提案することや、公共空間を活用したことがない方のお手伝いをすることで、新たな交流の場が生まれるのではないかと考えるを元に2つのプロジェクトを企画しました。

1つ目は普段、一般の方にイベント貸出しをしていないJR川崎駅直結のコモレビテラスを市民活動団体の取組と繋げて活用することで、市民活動のプラットフォームを創出できないかという取組です。



今回は「まなび×かわさき×であい」をコンセプトに、コモレビテラスで開催するワークショップ企画として、「コモレビコモンズ」という名前で、子育て中のママ向けに、クリスマスリースを作成し、主催者や参加者同士が緩やかに繋がることを意図したイベントを川崎区盛り上げ隊！・幸区盛り上げ隊と協働して実施しました。

実施にあたって、コモレビテラスの活用を関係機

関に相談していくと、駅直結といった利便性の高い空間であることがメリットである一方で、需要が高いために営利目的や独占的な利用が難しく、公共性の高い活用を求められるなどの課題を知ることができました。

また、利用時間の制限から、イベント日時を平日の午前中とし、対象を未就学児とその保護者に絞って開催することにしましたが、結果として参加者が少ない中での開催になりました。イベント自体はとても和やかな雰囲気でも、参加してくれた方と主催者が意見交換をすることができたので、もっと多くの人に参加してもらうことができれば、より良い取組にできるのではないかと思います。

開催日時・対象等や場所の制約などの課題や改善点については、継続的な活用を行っていく際に活かしていきたいと思っています。

2つ目の企画は、越水さんが所属する「高津区を。溝ノ口を。楽しくしていこう！」というコンセプトで、イベント運営・企画などを行う「知っとこ！たかつ」のメンバーと連携し、久本薬医門公園で地域の魅力を知り、まちに愛着を持ってもらうきっかけとなるお祭りを開催するというものです。



キッチンカーやダンスショー、キャンドルづくりのワークショップなど、地域の人が主体となり、子どもも大人も楽しめるイベントとして、3月8日の少し寒さが和らいでできた時期に「わくわくノクチフェス」という名前で開催することにしました。

公園の利用許可申請や行事開催届などの調整を

行いながら、イベント出店者の方々との調整を進め、開催に向けてチラシを印刷し、広報を始めました。

ところが、新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響により、残念ながらイベントは中止せざるを得ない結果になりました。

イベント自体は実施できなかったものの、場所を借りるためや食品を販売するために必要な行政手続き、申請のための条件、許可に係る時間、出店者の調整や必要な資機材など「知っとこ！たかつ」のメンバーとともにイベントを主催する側の経験を得ることができました。今回得た経験は、次回開催する際に活かしていきたいと思います。

まちのこえがカタチに

これらの企画以外にも、スピンオフ企画として、久留米（福岡県）×溝口でまちづくりの最前線にいる2人のクロストークを開催するなど、幅広い企画を年間通じて開催しました。

3班の企画は大きなイベントを一つ実施するというものではなく、まちの人の一人ひとりの小さな想いを伴走支援するということに力を注ぎました。

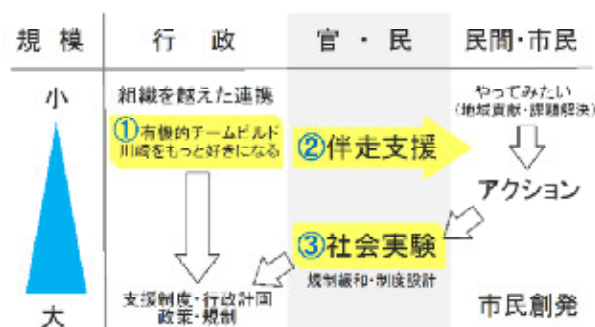
多種多様な企画を実現することで行政の枠を超えた新たな視点を得るとともに、企画で知り合った人たちが繋がり、新たな企画が生まれるという好循環を、1年という短い期間でも体感できたように思います。

まとめ

これまで事業を実施する際には、「PDCA」サイクルを重要視してきましたが、現在は、「DCDC」といった「Do（実行）」と「Check（評価）」を繰り返すことで、実践しながら、改善していくスピード感が行政にも求められています。

1年間の「まちのひろば」職員プロジェクトチームを通じて、スピード感をもちながら、小さい規模のアクションを行政・民間の枠を超えて、実践していくことの大切さを学びました。

職員プロジェクトチームで実践したことで必要と感じた仕組みを下記の図にまとめました。



まず、①市職員のまちデビュー研修のように行政内で組織を超えた連携をはかることができるようチームビルディングを行うこと。②「コミュニティスナック日進町」や「コモレビコモンズ」のように市民（民間）主導の地域貢献等につながるアクションを、行政として、伴走支援すること。③「わくわくノクチフェス」のように実践した空間活用で得た知見を、行政が制度の規制緩和や設計に反映していくこと、この仕組みを絶えず繰り返すことで、小さな実践をまちづくりにつなげていくことができるのではないかと思います。

職員自ら実践することでの確かなニーズを把握し、制度に反映していくことは、新たなアクションが生まれやすい環境をつくるために必要なことです。これらの取組が最終的に「これからのコミュニティ施策の基本的考え方」における「市民創発」の機運醸成に繋がるのではないかと考えています。

【4班】NECの公開空地を活用したまちのひろばの創出について「しもぬまべ共創プロジェクト」



メンバー

経済労働局イノベーション推進室

藤本 絢

まちづくり局都市計画課

伊東 左江子

中原区役所地域みまもり支援センター（福祉事務所・保健所支所）地域ケア推進課

工藤 青人

宮前区役所まちづくり推進部企画課

山田 将史

市民文化局コミュニティ推進部協働・連携推進課

宮下 拓

なぜNECの公開空地！？

4班では、はじめに市の地図を広げながら自由な発想で「まちのひろば」づくりに向けたアイデア出しを行いました。各メンバーが考えてきた「活用できそうな資源」、「考えてみたモデル」、「好きなまちのひろば」などを出し合う中で、4班のメンバーは中原区役所で日本電気株式会社（以下、NEC）と協働による取組を進めてきた職員、まちづくり局で「公開空地等の活用に関する要綱」を策定した職員、そして武蔵小杉近辺でゴミ拾いの市民活動を行っている職員が偶然にも集まっていることが分かり、共通する話題として、向河原駅前に立地するNEC玉川事業場の公開空地の話が出ました。「そもそも公開空地は地域の方でもある程度は使えるはずなのに、NECの公開空地は立ち入ってはダメだと思っている方が多いのではないか？」、「NECと地域の方と一緒に何か活用できる取組が行える可能性があるのではないか？」などの意見が出てくる中で、自然とメンバー全員がNECの公開空地を「まちのひろば」のモデルとして何かできないか検討するこ

とで一致しました。

また、同じタイミングでプロジェクトチームの全体会として、NECの「未来創造プロジェクト」との共創セッション（※）に参加し、NEC内においても実現すべき未来とその課題を解決する方法を構想している取組があることを知り、「まちのひろば」の取組と共鳴していると感じました。

そこで、4班としては、NECに公開空地の活用について一緒に検討していただけるか相談してみることになりました。NEC玉川事業場に直接伺い、「まちのひろば」の考え方を説明した上で、玉川事業場の公開空地をまちのひろばのモデルの一つとして、地域の方と一緒に取り組んでいただけるか相談したところ、方向性について賛同いただきました。NECに賛同いただいたことにより、次は地域の意向も確認しながら具体的な内容について検討していくことになりました。

※NECの「未来創造プロジェクト」との共創セッションについて

<https://wisdom.nec.com/ja/article/2019101102/index.html>



NEC玉川事業場の公開空地

まずは地域の声を聞いてみる

取組を進めていく上では、地域の声が一番大切です。そのため、まずは公開空地が含まれる町内会（下沼部町内会）と隣接する商店会（向河原商栄会）に公開空地の活用について説明するとともに、地域の課題及び公開空地にどのような活用が求められているかについてざくばらんに意見交換を行い、次のような意見がありました。

●地域の課題

- ・武蔵小杉と向河原との間に壁を感じる

- ・「地元」と「マンション住人」の交流が少ない
- ・子どもを中心に交流する場や遊び場が少ない
- ・新たな住民層が地域を知るきっかけが少ない
- ・地域住民はお祭りに飢えている、企画不足と感じている

●活用方法

・NECレッドロケッツ(バレーボールチーム)が来ると、盛り上がる、宣伝になる
また、地域としてはこのような取組は好ましいが、町内会や商店会が主体として参加することは、マンパワーとしても厳しいと思うので、イベント等を開催できる子ども会などにも相談した方がよいと提案をいただきました。

これらの声を基に、取組のコンセプトをメンバー間で検討し、『NEC公開空地を活用した「武蔵小杉」と「向河原」のエリア間における交流の活性化』と定めて、コンセプトに向けた取組のターゲットと得られる効果を次のとおり考えてみました。

●ターゲット

- ・向河原・武蔵小杉エリアの小学生のいる親子
- ・公開空地周辺に住む方、利用する方、興味のある方

●得られる効果

- ・新たな交流が生まれる
- ・地域を知ってもらう
- ・地元意識の醸成
- ・武蔵小杉、向河原の中心にある当該公開空地が交流を生み出す場としてのポテンシャルを探る

そして、コンセプトの実現に向けて、まずは公開空地を小さく活用していく機会を設けるために、11月16日からの1週間を「公開空地活用WEEK」として、日替わりで地域の方やNEC社員などを中心に様々な活用を行うことで更なる活用の可能性を探るイベントの企画案を作成し、NEC及び地域と一緒に作り上げていく方向で調整を進めていくこととしました。また、「公開空地活用WEEK」に向けた試行的な取組として、10月19日に地域のヨガサークルを主体としたヨガイベントを企画しました。このヨガイベントは、まずは試行実施することと併せて、地域の方に気軽に参加してもらい、その中で新たに活用したいという意向があれば、

「公開空地活用WEEK」において活用してもらうための位置付けでもありました。ヨガイベントは、NEC及び地域からも協力を得て、公開空地の初めての活用に向けて準備は進んでいきました。



台風被害により中止も前提とした検討

初めての公開空地活用に向けて、着実に進んでいいた中、ヨガイベント一週間前に台風第19号の影響により、NEC公開空地をはじめとした周辺地域において浸水被害が発生しました。浸水被害により、予定していたヨガイベントも中止とし、「公開空地活用WEEK」についても、メンバーとしては中止にした方がいいと考え、地域の方々（近隣4町内会、近隣2子ども会、商店会、青年会）に意見を伺いました。

すると、地域としては、浸水被害の対応で人や物の協力をするのは難しいが、地域全体が大変な状況の中で、次のような内容や目的として行うのであれば、日程等を再調整の上で開催してもよいのではないかと提案がありました。

- ・子どもたちが笑顔になれるイベントがよい
- ・小規模で台風の被害から前向きになれるような内容がよい
- ・NECレッドロケッツ(バレーボールチーム)がもっと地域に出てきたり、一緒に盛り上げられることができればよい

これらの提案をNECに相談し、「公開空地活用WEEK」はコンセプトを次のとおり見直し、内容も大幅に変更して、NECとプロジェクトチームを中心に実施していく方向で再調整していくこととし、地域にも理解いただきました。

●コンセプト

地域の方々の想いをもとに、「台風被害でつらい想いをした子どもたちが笑顔で楽しめる場の創出」

新しいコンセプトを基にした調整

10月末に新しいコンセプトを定めて、約3週間という非常に短い期間で新たな内容を検討していくこととなりました。当初の「公開空地活用WEEK」のように一週間で様々な活用を行うのではなく、一日限りで子供たちが楽しめて笑顔になれるイベントとして、公開空地でNECとプロジェクトチーム、そして地域で何かやりたいと思っている方々でできることを考えていきました。まず、地域で活動している方にも新たに声掛けしたところ、公開空地の近くにお住まいで和紙灯りづくりをしている伊藤さん、向河原駅前の商店街でヨガ教室をしている吉川さん、多摩川沿いでナイトキャンドルをしている平方さんと鈴木さんから、一緒に盛り上げたいと言ってくることができました。

これらの方々に加えて、NECからは、NECレッドロケッツホームゲームでダンスを披露するNECダンサーズとNPO法人ダンスラボラトリーによるダンス体験を、プロジェクトチームからは、市民スポーツ室の協力も得てボッチャ体験を行うこととして、11月22日に次の内容でイベントを開催することに決定しました。

また、11月24日のNECレッドロケッツのホームゲームともコラボレーションをして、イベント後も子どもたちが笑顔になれるような機会を設けました。

●イベント名

「しもぬまべこどもナイト～つくって・おどって・たのしもう」

●内容

- ・和紙灯りづくりの体験ワークショップ
(伊藤苗子さん)
- ・ハンモックヨガ体験 (吉川由維さん)
- ・キャンドル鑑賞会 (鈴木さん、平方さん)
- ・子供向けのダンスワークショップ
(NPO法人ダンスラボラトリー・NECダンサーズ)
- ・ボッチャ体験 (プロジェクトチーム)
- ・イベント二日後のNECレッドロケッツホームゲームへのイベント参加者の招待やセット間パフォーマンス (ダンス) への参加

内容決定後は、当日に向けての細かい調整を急ピッチで進めました。具体的には、イベント会場の机やイスなどの備品については、主に会場となるNECの備品を使用したり、雨天時は、公開空地が使用できないため、NEC社屋内で開催する方向で調整したりしました。その他にも、キャンドル鑑賞を奥に配置するレイアウトにすることで人が集まりやすくする工夫をしたり、子どもたちが各ブースをまわることも自体も楽しめるように、プレゼント付きのスタンプラリーを準備したりしました。慌ただしい準備を経て、いよいよイベント当日を迎えました。



子どもがわくわくするようなチラシを作成



人が集まりやすいレイアウト案

「しもぬまべこどもナイト」開催！

あいにく当日は朝から大雨となってしまいました。雨天により、公開空地は使用できなくなってしまいましたが、NEC玉川事業場サウスタワー社屋内に会場を変更して、「しもぬまべこどもナイト」を開催しました。



和紙灯りづくりの体験ワークショップ



子どもたちが作った和紙灯り



子供向けダンスワークショップ



幻想的なキャンドル鑑賞



ハンモックヨガ体験



ポッチャ体験

悪天候にも関わらず、35名の子供を含む52名の地域の方が参加し、NECからもボランティアスタッフ16名を含む25名、川崎市からもプロジェクトチーム以外の協力スタッフ9名を含む14名の合計91名が参加しました。イベント中は会場のそこかしこから笑い声があふれ、コンセプトである「台風被害でつらい思いをした子どもたちが笑顔で楽しめる場の創出」を地域、NEC、行政が一緒に実現することができました。

また、イベントの2日後に開催したNECレッドロケッツホームゲームでは、ワークショップで作った和紙灯りの展示やセット間パフォーマンス(ダンス)への参加の場を設けて、更に子どもたちが楽しんでもらえました。



試合会場における和紙灯りの展示



セット間パフォーマンスでダンスを披露



和紙灯りを持って選手入場

次のステップに向けての課題の整理

今回は、台風被害の影響もあり、急遽NECとプロジェクトチームが共催でイベントを実施する形になりましたが、ゆくゆくは地域の方々が主体的に公開空地を活用していくことが望ましいと考えているので、次のステップに向けて取組を振り返ってみました。

●課題

・地域との調整過程

急遽コンセプトを変更し、短い期間で準備を進めることとなったため、地域への説明が十分に行えな

った部分もあったことから、今後は余裕を持ったスケジュールで取組を進めていく必要があります。

・取組の継続性

NECと行政が人員や費用等の大きな負担をする形で実施していくことは難しいと考えます。その一方で地域としても既存の様々な取組がある中で、新たな負担は簡単には増やすこともできません。

●良かった点

・活用のスタート

多くの方の協力で素晴らしい内容となり、公開空地等を地域のために活用していく第一歩を踏み出しました。

・関係者との距離感

調整の過程で地域、NECをはじめとした関係者の方との距離が少し縮まったため、今後の取組について相談しやすくなりました。

・何より立場が違う皆さんが楽しみながら行えました。

実施結果や課題を踏まえた次のステップに向けて

公開空地等を地域へ開放していく取組であった「しもぬまべこどもナイト」は、それぞれがこれまでの立場や考え方等を超えて、少しずつ踏み出せたからこそ実現したものだと思います。特に、NECという大きな「企業」が、「地域」に向き合っているというのは、地域にとって大きな強みでもあり、取組を更に進めていくには、地域・企業・行政の3者の相互理解が深まれば、それぞれが今まで以上に前に踏み出し、WIN-WIN-WINで取組を進めることができるのではないかと考えました。

そのために、この公開空地を、交流の場として、地域でも活用していくために、地域・企業・行政の3者がやってみたいことやそのためにできることを出し合い、今後の活用へのアクションにつながるアイデアを生み出す場を設けてはどうかと考えました。そこで生まれたアイデアを小さなことからでも3者で積み上げていくことで、相互理解が深まり、更なる展開が見えるのではないかと考えました。この想いをNECと地域に説明し、理解いただいた上で、3者でアイデアを生み出すイベントを「しもぬまべ地域共創イベント会議」と名付けて開催するこ

とにしました。

「しもぬまべ地域共創イベント会議」の開催

1月23日にNECとプロジェクトチームの共催という形で3者のアイデアを生み出すイベント「しもぬまべ地域共創イベント会議」を開催しました。会場はNEC玉川事業場の共創スペースとし、会議の開催前には、NECの社屋内見学会を実施し、地域とNECの距離を縮める機会を設けました。

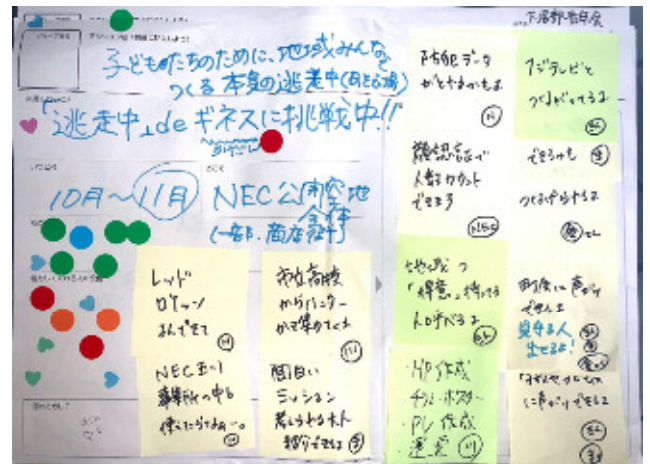
会議には平日の夜にもかかわらず地域の関係者20名、NEC社員10名、市職員6名が参加し、これまでの取組と今後の方向性を説明した後に、3者をミックスしたグループごとのワークショップによる、公開空地における活用のアイデア出しを行いました。また、アイデア出しを行った後は、そのアイデア実現に向けて、各立場からどのような協力ができるかについても話し合う時間を作りました。最後に、グループごとにまとめたアイデアワークシートを発表するとともに、実現したいアイデアへの投票を行いました。

●各グループで出てきた主なアイデア

- ・真夏の癒しスポット(納涼祭の復活)
- ・向河原フェス(お祭りがしたい)
- ・誰もが輝けるオープンステージ(灯りと音楽とダンスフェス)
- ・光と音のまちかどドラム(子どもの遊び場づくり)
- ・地域みんなで「逃走中！」(ギネスに挑戦！)



しもぬまべ地域共創イベント会議の様子



各立場で協力できることをまとめたアイデアワークシート

グループごとに盛り上がりを見せて、各アイデアに対して3者の資源を生かした協力ができる可能性が見えてきた一方で、限られた時間の中で、3者それぞれのメリットを事前に共有できないまま、ワークショップを行う形になったために、会議参加者の共通理解が不十分となってしまった部分もありました。しかしながら、半年間かけて取り組んできた公開空地を活用する取組について、3者が同じ場でアイデアを出し、取組の今後について共有できたという部分では、非常に意味のある時間となりました。

まとめ

これらの取組を通じて、地域にとって今まで活用されない「もったいない空間」であった公開空地を活用することで、「こんなこともできるんだ」という可能性を地域・企業・行政の3者が認識するきっかけづくりになりました。また、ワークショップ等を通して3者がWIN-WIN-WINになれるかもしれないという現状も少しずつ見えてきました。

その一方で活用していく上での様々な課題(資金、設備、継続性など)も見えてきました。そのような中で公開空地の活用を継続していくためには、3者の相互理解をさらに深め、小さなことからアクションを起こして、運営体制の構築を目指していくことが求められていると思っています。

今年度は台風の影響により、地域の力を引き出せず、また、悪天候により「公開空地」の活用は行わ

ことはできませんでした。来年度は地域とNECと共に小さな取組を積み重ねて、持続的に活用していく体制構築に向けたステージとなるように、プロジェクトチームとして引き続き取り組みを進めていきたいと考えています。

●令和2年度の取組予定

ステップ1 公開空地バリア取り払い期間

(～9月)

小さなことを実験的に複数回実施(自ら活動する地域の方とのコラボレーションによる活動、NECイベントとの連携、プロジェクトチームメンバー個人でもチャレンジ!等)

⇒ 様々な活用を地域の方に見ていただき、参加してもらうことで活用のイメージをつかんでもらう

ステップ2 持続的发展に向けた運営体制の検討期間 (10月～)

・ステップ1の評価や課題整理を行い、地域主体による次年度以降の運営体制構築へ